「かいづか家族の日」作品コンクール

問合せ先　社会教育課☎072－433－7125

市では、11月の第３日曜を「かいづか家族の日」とし、今一度、家族の大切さを見つめ直す取組みを実施しています。

料理コンクールでは、市内在住の小学４年生～中学３年生と保護者の２人１組を対象に「豚バラ肉と貝塚産の食材を使った料理」をテーマにレシピを募集。書類選考を通過した５チームが11月18日、実技選考に出場し、腕をふるいました。

エッセイ・写真コンクールのテーマは「家族」。合わせて110点の応募作品から20作品が選ばれました。

市は平成30年に「あったか家族都市」宣言を制定しました。今後も家族のありかたや地域の結びつきの大切さを見つめ直す「かいづか家族の日」の取組みを推進していきます。

料理コンクール表彰式

入選された５チームのレシピはホームページをご覧ください

料理部門 優勝　三四　貴弘さん　菜乃さん(二色小６年)

ナスやタケノコなど、貝塚産の材料をふんだんに使いました

まるごと貝塚春巻き

講評　料理コンクール審査員 安場竹広さん(辻調理師専門学校西洋料理助教授・貝塚市在住)

自由な発想とすごく考えられたアイデアで楽しく料理を作ってくれたことが非常に印象に残っています。美味しい料理を作ると誰もが笑顔になります。これからもたくさん美味しい料理を作って、たくさんの笑顔を作りだしていってほしいと思います。

講評　料理コンクール審査員 安場昌子さん(辻日本料理マスターカレッジ助教授・貝塚市在住)

日頃から一緒に料理を作って会話をしているようで、段取りも良く役割分担がきちんとされていました。確認作業も二人でしっかりしながら笑顔で作っているのが素敵だなと思いました。料理人には笑顔が必要だということを改めて確認しなおしました。皆さんには、これからも笑顔で料理を楽しんでほしいと思います。

写真部門 最優秀賞　久野慶太郎さん(西小６年)

「家族旅行」

家族で愛知県の蒲郡市へ行きみんなで足湯に浸かっている時の写真です

エッセイ・写真コンクール表彰式

講評　エッセイ・写真コンクール審査副委員長 朝倉康則さん(貝塚市在住のカメラマン)

応募された作品には、いろいろな家族の姿が記録されていました。ぜひ、これからも長く家族の記録を撮り続けてほしいと思います。

また、写真を撮る側から観る側へのメッセージということで、写真に「タイトル」をつけることを大事にしてください。

講評　エッセイ・写真コンクール審査委員長 吉村萬壱さん(貝塚市在住の芥川賞作家)

今回の応募作品は、家族への思いや台風21号をきっかけに感じたことなど様々な「家族」について描かれ、当たり前のことが当たり前でなかったと気づかされたり、新たな発見をさせてくれる作品もありました。ぜひこれからも文章を書き続けてください。

エッセイ部門 最優秀賞

同居して感じたこと

西村壽賀子さん

我家は３年前、娘一家が引越してきたため現在４世代同居している。10才から98才までかなりの年令差があり、生活のリズムや行動にも差がある。そのため、お互いに我慢しなければならないこともある。しかし、家族の人数がふえると、話題も多くなり、子供もいろいろな事を見たり聞いたりしている。又、年寄りは子供から元気をもらって、脳が活性化してくるという利点もある。

子供は親、兄妹関係の中で、気にいらない事があると、祖父母の傍にくる。祖父母は子供の思いに寄り添い、ゆったりした気分で接するため、心の拠り所となるようである。

先日、親戚の人が家にきた時、足が痛むのかゆっくり立ちあがる様子をみて、孫娘は「大丈夫？」と言って、誰も何も言わないのにその人の手をひき、段差のあるところはゆっくり歩き車まで送って行った。その人は「年寄りと一緒にいるから、よく気がつくわ。ありがとう。」と言って喜んでくれた。やさしさや、思いやりの心が育まれていることに気づいた。だが、子供の躾はなかなか難しい。親の責務は大変である。大人の言うことはあまり聞かないが、大人のすることはよく見ていて、同じことをしているのに驚いた事がある。

家庭という小さな集団の中で、協力しあい尊敬しあい、感謝しあうことが大切であることを伝えていけたらいいなあと思っている。そして、社会という大きな集団へと挑んでほしいと願っている。